

Center for Innovation in Traditional Industries Yearbook 2024

Kyoto Seika University

京都精華大学

伝統産業イノベーションセンター
イヤーブック2024



伝統産業イノベーションセンター
イヤーブック2024
Center for Innovation in Traditional Industries
Yearbook 2024

京都精華大学
Kyoto Seika University

未来の、手仕事のために

京都精華大学が4年制として開学した1979年、学生が伝統産業の工房に通い手仕事の技やその精神性を学ぶ[学外実習(現:京都の伝統産業演習)]が開講しました。以来、約40年間で累計4,000名近くの学生がこの演習に参加し、今では京都精華大学の名物科目のひとつとなっています。

身につけた伝統技術を自身の表現に取り入れる学生もいれば、日本文化への関心を深めて研究者や起業家を目指す学生もいました。また、実習をきっかけに職人としての道を歩み始める学生も少なくありません。実習期間はわずか2週間ですが、さながら弟子のように過ごす日々が学生たちに「伝統」と呼ばれるものの一端を伝えています。

実習を契機に、京都精華大学では多角的な視点で伝統産業界との協業が始まりました。製品開発やブランディング、技術記録・調査、職人文化研究など、京都精華大学が誇る5学部それぞれの専門性を活かした取り組みをおこなっています。

伝統産業イノベーションセンターは、これまで京都精華大学が培ってきた伝統産業の知見を集約し、より活発な教育・研究活動に還元するために2017年に設立しました。[研究][教育][社会連携活動]を大きな軸として、世界有数の工芸産地・京都を拠点にさまざまな国や地域の手仕事との連携を目指しています。

かつてない速度で暮らしのあり方が変化する時代にあって、1000年前の職人技に挑み続ける伝統産業界の知見は私たちに多くの気づきをもたらします。

技術の背景にある物語や、土地に暮らす人々の営み。
自然素材の厳しさ、身体を動かして汗を流すことの意味。

伝統産業が次代への継承に苦しむなか、大学が「伝統」に学ぶだけの時期は終えました。
先達への尊敬と深い理解をもとに、文化の本質が受け継がれた「未来」を描き続けることが、伝統の街で育った京都精華大学の使命だと考えます。

For the Future of Handcrafts

The Kyoto Traditional Crafts Internship began in 1979, the year Kyoto Seika University became a four-year institution. Since then, the program has continued to offer opportunities for students to learn techniques and philosophies of handcrafts at traditional workshops and studios. Over the course of 40 years, almost 4,000 students have participated in the program, and it has now become one of the most well-known courses in the university's curriculum.

Some students incorporate the newly-acquired traditional skills into their work, while others go on to become researchers and entrepreneurs with a deeper appreciation of Japanese culture. Inspired by their internship experience, there are also those who pursue careers in traditional crafts. The program is only two weeks, but the time spent as short-term apprentices offers students a glimpse into age-old traditions.

Through the internship program, Kyoto Seika University began collaborating with the local traditional craft industry. Drawing on the expertise of the five academic departments, the university has initiated product development and branding projects, as well as documentation of cultural knowledge and research into the everyday lives of artisans.

The Center for Innovation in Traditional Industries was established in 2017 to compile and utilize the academic resources on traditional industries cultivated by Kyoto Seika University. Located in one of the world's leading sites of craft production, the Kyoto-based center aims to build new partnerships in handcrafts across national and regional borders through research, education and public engagement.

At a time when our lifestyles change at an unprecedented speed, there is much to learn from craft professionals practicing artisanal skills from a thousand years ago.

There are stories, communities and real lives behind every technique.
There is meaning in the harshness of natural materials and in manual work.

We cannot simply learn from “tradition,” while traditional industries struggle to pass down its wealth of knowledge to the next generation. As an institution that has grown in a city of traditions, we believe it is Kyoto Seika University's mission to envision a future that inherits the essence of our culture, with respect and understanding of our predecessors.

米原 有二

京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター長

センターの設立から7年目となった2024年度は、今後の調査活動やプロジェクトの土台となる研究会・勉強会の開催に力を注ぐ年になりました。

継続的に取り組んできた「八瀬陶窯」に関するプロジェクトは玩具・民俗・環境・建築の各分野に展開してさまざまな視点から八瀬地域をみつめてきました。

また、京都の伝統産業の未来を担う若手職人団体「京の伝統産業わかば会」の皆さんとともに手仕事の技術と今後のあり方を考える場をつくることもできました。

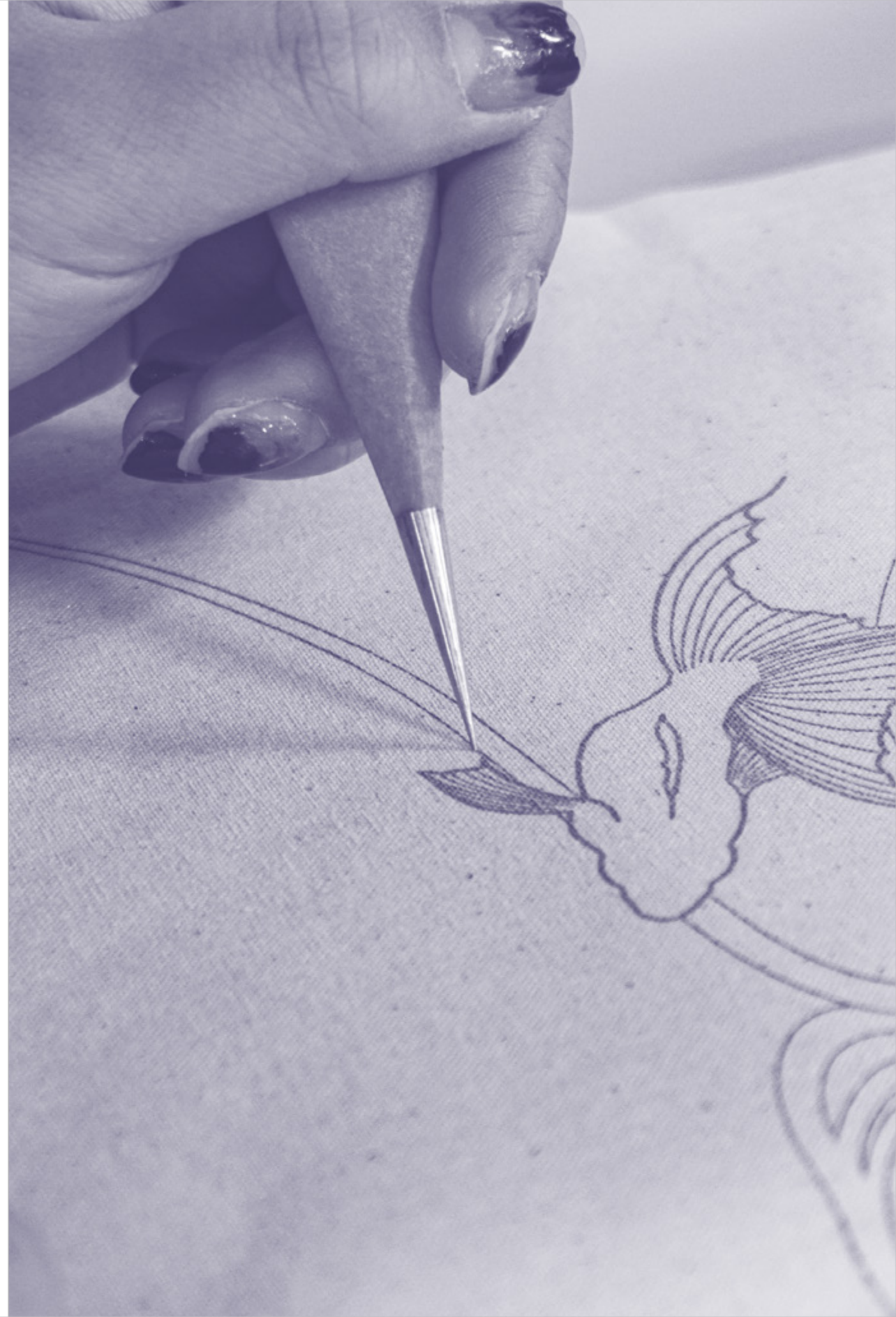
京都精華大学の名物授業「京都の伝統産業実習」「京都の伝統工芸講座」が来年45年目の節目を迎えるにあたり、あらためて授業の意義と今後の課題を語り合うこともできました。

ご協力を賜りました皆さまに厚く御礼を申し上げます。所属や立場を超えて、伝統産業や伝統文化を起点に多くの話題が飛び交う「種蒔きの場」こそが私たちの宝物です。

2025年度には、八瀬地域に関するプロジェクトの展覧会を予定しています。かつて、少人数で取り組んでいたこのプロジェクトが今や大きく芽を伸ばし、どっしりと根を張りつつあることを報告する機会として、一同で準備に取り組んでいます。

本学ならびに本センターが取り組む教育、研究活動は多くの学外の皆さまのお力添えで実現しています。これまでのご協力に心から感謝を申し上げます。

また、これからも一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。



02	伝統産業イノベーションセンターについて About the Center for Innovation in Traditional Industries
04	こあいさつ 米原有二 Foreword Yuji Yonehara
08	研究会 手仕事の学校
12	手仕事の学校 特別編 44年目を迎えた「京都の伝統産業実習」の現在地
18	研究会 伏見人形研究会
34	複々製の素朴美のルーツ ―伏見人形が郷土玩具のお手本と言われるワケ 軸原ヨウスケ
36	伏見人形の流れを汲んで始まった岡山の久米土人形 長友真昭
40	特集= 八瀬陶窯からみる世界
48	八瀬の石黒さん家から見た世界 中村裕太
52	An Annual Seminar on “Architectural Photography / 建築写真”, To Be Continued… Cecile Laly
54	センターの活動
56	伝統産業イノベーションセンター 学内センター員・職員 Researchers and Staff Member
59	京都精華大学 協定校／機関 Kyoto Seika University International Partner Universities and Institutions



研究会

手仕事の学校

コーディネーター—— 淡田明美 [伝統産業イノベーションセンター]

- 1 京友禪 2024年6月22日(水) 18:10～20:00 京都精華大学 本館4階H-417
- 2 珠数 2024年7月6日(土) 14:40～17:50 京都精華大学 明窓館1階ギャラリーパーク
- 3 京菓子 2024年9月29日(日) 14:00～15:30 京都精華大学 明窓館2階 IC-Cube
- 4 京友禪 金彩 2024年11月28日(木) 14:40～17:50 京都精華大学 本館4階H-417
- 5 結納飾水引工芸 2024年11月29日(金) 14:40～16:10 京都精華大学 明窓館3階ディスプレイスペース



伝統産業に携わる人々をゲストに招き、その仕事に学ぶ研究会。2024年度は京都市の若手職人団体「京の伝統産業わかば会」との連携企画として、5つの分野の手仕事をテーマにした講義＋ワークショップを開催しました。ワークショップに用いる道具や材料を、職人のみなさんが実際の仕事で使うものに近いものとするこゝで、手仕事の本質を学び、考える機会となることをめざしました。

2024年度 実施日程

第1回 | 5月22日[水] | 18:10—20:00 | 京都精華大学 本館4階H-417

【京友禪】キモノのひながた制作 ゲスト: 奥野むつみ [木村染匠株式会社/染色作家]

現在、染色作家として活躍される奥野むつみさんは本学卒業生（芸術学部日本画専攻）でもあります。講義では、色鮮やかな京友禅の魅力と繊細な図案について、各工程の専門職による分業体制についてのお話がありました。ワークショップでは、奥野さんが用意した図案をもとに参加者それぞれが配色に挑戦。染色工程における決まりごとを守りながら、着用する人物、機会を思い浮かべて図案に着色していきます。最後に参加者全員で図案を持ち寄り、各自の配色意図の解説をおこないました。同じ図案であっても、配色の妙でまったく異なる魅力が生まれることを実感しました。



第2回 | 7月6日[土] | 14:40—17:50 | 京都精華大学 明窓館1階キャリアパーク

【珠数】略式片手念珠の紐房(四つ目)制作 **ゲスト:** 栗塚芳恵 [神戸珠数店]

栗塚芳恵さんによる講義では知っているようであまり知らない珠数の概要から。一般的な珠や房についての説明や宗派による違い、制作工程と材料についての解説などを実際に実演を交えながらお話いただきました。また、栗原さんは芸術系大学を卒業後に珠数職人の道を歩まれたことから、工芸を仕事にすることなどについてもお話いただきました。ワークショップは、参加者が好みの紐を選ぶオリジナルの珠数制作。まずは珠に紐を通して四つ目編みで締めていきます。2色の美しい編み目があらわれてきたら完成間近。終始なごやかな研究会となりました。



第3回 | 9月29日[日] | 14:40—15:30 | 京都精華大学 明窓館2階 IC-Cube

【京菓子】自分だけの和菓子を作りませんか ゲスト: 田村さくら [菓子すず]

田村さくらさんによる実演と解説の同時進行で伝統的な京菓子の製法を学びました。京菓子のかたちや色彩の題材には、さまざまな京文化が息づいています。ワークショップでは、京菓子の伝統的な意匠である「菊」に取り組んだあとで、参加者各自が図案から考えるオリジナル和菓子に挑戦しました。澁餡やきんとんなどの材料をイメージ通りのかたちにするためには、指先の繊細な動作が必要です。実演時には、和菓子の世界における衛生面への配慮についても解説があり、食品を扱う匠ならではの学びが多くありました。



第3回 | 11月28日[木] | 14:40—17:50 | 京都精華大学 本館4階 H-417

【京友禅 金彩】金彩でトートバッグをつくろう ゲスト: 田中栄人 [田中金彩工芸]

金彩は、染色した生地 に金銀箔などで加飾加工をする技法。華やかな京友禅には欠かすことができない伝統の技です。田中栄人さんの講義では、これまで制作に携わられた作品・商品の解説とともに、技法や道具・材料について、お話しいただきました。ワークショップでは、トートバッグにあらかじめ印刷した文様を金でなぞる「金線描き(筒描き)」に挑戦。筒に入れたペースト状の金を絞り出して均一に、なめらかに線を描きます。作業は筒の先端に付ける真鍮製の「先金」を削ることから始まり、自身の手に合った道具を用意することの大切さを実感しました。



第5回 | 11月29日[金] | 14:40—16:10 | 京都精華大学 明窓館3階 ディスカッションスペース

【結納飾・水引工芸】お正月飾りの制作 ゲスト: 源田陽子 [水引元結源田]

水引は紙縊に糊をして、金銀箔や染色で色を付けたもの。結び方やその組み合わせによる意匠に吉祥の意味をもち、伝統的な儀礼や祝い事を彩ります。講義では、水引工芸の歴史や技法、結びの種類などについての解説がありました。ワークショップでは、ひと月後に迫ったお正月飾りと箸置きを制作。「折る」「結ぶ」「編む」を繰り返す工程のなかに細かな手仕事がたくさんあります。材料に和紙を用いるため、失敗した折り跡が消えない点も難しさのひとつ。ひとつひとつの動作を丁寧に積み重ねていくことの大切さを実感する機会でした。



手仕事の学校 特別編

44年目を迎えた
「京都の伝統産業実習」の現在地

登壇者—— 千田優希氏 [唐長] 山田悦子氏 [山田繊維／むす美]

矢鋪愛莉 [デザイン学部プロダクトデザイン学科ライフクリエイションコース4年生／2023年度実習生]

聞き手—— 米原有二 [伝統産業イノベーションセンター]

手仕事の学校 特別編「京都の伝統産業実習」の現在地
日時＝2025年1月17日(金) 18:10～19:40
会場＝京都精華大学 明窓館 E キャンパスパーク

(左から) 米原有二、千田優希氏、山田悦子氏、矢鋪愛莉

京都精華大学が毎年実施する「京都の伝統産業実習」では、学生たちが約2週間にわたって伝統産業の現場に弟子入りして学びます。1980年に始まり、44年目を迎えたこの授業を通して、これまでに4,000名を超える学生が実習に参加し、伝統の技術や知恵、自然素材に向き合う姿勢などを学んできました。また同様に長年続く「京都の伝統工芸講座」では、京都の伝統産業・伝統文化に携わる方々をゲスト講師に招き、連綿と続く京文化の精神性を学ぶ機会としてきました。今回は、両授業にご協力を頂く千田優希氏(唐長)と山田悦子氏(山田繊維／むす美)のおふたりを招き、実際に授業に参加した学生や教員も交えて「伝統に学ぶ」意義について意見を交換しました。



米原—— 今回は、本学の伝統産業関連の科目群が始まって今年度で44年目になりますので、あらためてその意義を考える機会として企画しました。「伝統産業実習」は、本学が4年制大学として開学するときに学びの特色として設けられたものです。当時から多くの伝統産業関係者の皆さまのご協力を得て、2週間にわたる学外実習のような特殊な授業を継続してきました。現在では、5学部すべての学生が受講できる共通教育科目として開講しています。今日、ゲストにお迎えした千田優希さんの工房(唐長)では、44年前の初年度から毎年、実習生を受け入れてくださっています。また、山田悦子さんには講義科目「京都の伝統工芸講座」のゲスト講師として授業にお越し頂いています。本日はこのおふたりに加え、昨年度に唐長さんの工房での実習に参加した矢鋪さんを交えてお話をしていきたいとおもいます。カリキュラム構成を簡単に整理しておきますと、講義科目での基礎的な学びを経て、2週間の実習に臨む、という仕組みです。講義科目では、さまざまな分野でご活躍されている工芸関係者の方々を大学に招きます。近年ですと、プロダクトデザインやマーケティングといった分野の方にお越し頂くことも多くなりました。実習は、学生が約20ヵ所の実習先から選択して応募する仕組みです。実習生の受入数は実習先によって異なりますが、毎年30名前後が実習に参加します。実習先のほとんどが京都市内なので学生は自宅から通いますが、なかには石川県(加賀友禅)や福井県(越前和紙)、京都府綾部市(黒谷和紙)のように期間中は現地滞在する実習先もあります。

34年前に発行された『10年目を迎えた 京都精華大学 学外実習』という冊子が発見して読んできました。まだ「インターン」という言葉も一般的ではなかった当時、2週間にわたる学外授業を、それも伝統産業の工房でおこなうための仕組みづくりに学内外の関係者が奔走していたことがわかります。当時の唐長さんでの実習の記録も載っていました。もちろん、44年前を知る本学の関係者は今はいませんが、ずっと実習にお付き合い頂いている唐長さんには、そのご記憶がある。代が替わっても引き続きお付き合いを続けて頂くことのありがたさを感じます。

千田—— 44年前に実習が始まったときは、私はまだ小学生ですね。京都精華大学さんのお兄さんやお姉さんがうちの仕事場でわいわいと絵具を触ったりしていた風景を覚えています。当初は祖父が学生さんに教えていて、そのうち父が教えるようになり、今は私が教えています。毎年、夏になると実習の学生さんが来られるんですが、学生さんたちはいつも20歳前後。私はだんだん成長して、そのうち学生さんたちと同じくらいの年齢になり、いつの間にか親ぐらいの年齢になりました。

米原—— 三代にわたってお世話になってきた。

千田—— 振り返ると、楽しみながら学ぶ学生さんが多かったな、という印象です。夏の2週間の実習を終えた後も遊びに来る学生さんたちが多く、30年前、40年前の実習生で今もお付き合いが続く方が何人もおられます。多分、学生さんたちは私たちとの人間関係のなかで自分が学びたいことを学ぼうとしていたのでしょう。よく大学の帰りにうちの仕事を覗いてくれて、忙しかったら手伝ってくれて、お客さんが来たらお茶を淹れてくれたり。晩ご飯の時間になったら、母がつくったおでんをうちの家族と一緒に食べて、ゆつくりお風呂に入って帰って行く。のんびりした時代だったし、そういうお付き合いを私たちも楽しんでいましたね。

米原—— 当時の資料をみると、唐長さんの工房では毎年7名程の実習生を受け入れて頂いていました。かなり賑やかですね。

千田—— 今は2名ですもんね。もちろん、今の学生さんたちも楽しそうですよ。でも、昔に比べるとかなり忙しそうに見えますね。大学の授業や生活、就職活動とか。それは世の中が変わったから当然のことなんですが、うちの実習では効率や時短じゃない価値観を伝えられたら、と思って学生さんに接しています。

米原—— 昨年、唐長さんに実習に行った矢鋪さんに実習作品を持ってきてもらいました。

矢鋪—— 私は3年生の夏休みに唐長さんの工房で約2週間お世話になりました。この作品は3種類の桜文様の唐紙です。唐長さんでは、歴代の当主が自身の桜文様の唐紙を制作されることを知って実習作品のテーマにしました。唐長さんの当代、先代、先々代の桜文様がどれも素敵で、個性的だったので、その3種の唐紙を繋いでパネルに仕立てました。



米原—— パネルにすると唐紙の印象が大きく変わりますね。洋室にも馴染む。

千田—— 技術の習得も大切ですが、伝統を現代にどうかすか、という視点を考えて制作してもらいました。私たち職人は唐紙が現代生活のなかでどう位置づけられるか、ということをいつも考えているし、学生さんにも考えてほしい。矢鋪さんはとても真面目で、たくさん考えてこの作品を制作していました。実習中はたくさん話しましたね。

感覚を伝える

千田—— 唐紙の版木の文様を和紙にうつすとき、手のひらでさらさらと撫でるんです。この加減を人に伝える際に「優しく」や「まんべんなく」といった表現は適切ではないんですが、かといって無意識にしている動作をうまく言葉にできない。だから、実習では、できるだけ色んな表現で伝えたり、動作を見せたりします。あとは、自身の手を動かして感じてもらうしかない。

米原—— どの伝統産業にも共通することですね。過去の実習の記録資料にも、手仕事の感覚的な部分をカリキュラムとして扱うことの難しさが挙げられています。

山田さんには、講義科目で風呂敷についての授業をお願いしています。知識よりも先に触って感じる方法として、学生たちが実際に風呂敷を使って包み方を考えることから始めて頂いています。

山田—— 歴史上、四角形の布を使って物を包むという行為はずっと変わっていないんですよ。それはとても単純な構造で便利だから。学生さんは私の授業で初めて風呂敷に触る人がほとんどだと思います。生活の道具は実際に使ってみると、その便利さがよくわかる。風呂敷についての知識の前に、「包む」「結ぶ」という行為の本質的な部分にふれてほしいと考えています。

風呂敷を使うには結ぶ必要がありますが、結ぶ場所も、結び方も自分で決めなくてはいけません。だからこそ風呂敷は便利な道具なんですけど、決められないと使えない。細長い物を包むとき、丸いものを包むとき。包む物に応じた結び方で風呂敷を使いこなす必要があります。ボタンやファスナーのように決まった使い方を求める道具じゃないからこそ、まずは触りながら考えてもらいたいと思っています。

米原—— 受講生が100名を超える授業ですが、ほぼ全員に行き渡るくらい風呂敷を持参頂いています。最初は山田さんが結び方を伝えてペットボトルを包んだり、トートバッグのように結んで教科書を入れたりして。次第に学生たちはそれぞれに工夫をして結び方を考えるようになる。

山田—— 先ほどの千田さんのお話に続きますが、風呂敷の知識を学ぶだけではなく、生活の道具として考えてほしいんです。学生さん自身のライフスタイルの視点で風呂敷のデザインや機能を考えてほしい。それが伝統産業が次代に受け継がれる条件だと思う。

矢鋪—— 私たち20代にとって伝統工芸はとても遠いものですし、その仕事をする職人さんたちはもっと遠い存在です。ただ、私は2週間の実習で自分の生活と伝統工芸の交わりについて考えたり、想像できるようになったと思います。千田

さんのお仕事に対する気持ちを知って、同じ空間で作業できることにうれしさを感じたり。実際に現場に行って、自分で手を動かしてみないとわからないことばかりだったと思う。

千田—— なかなかうまく言葉にして教えてあげられないんですけど、言葉にしづらいことこそが本当に知ってほしいこと。だから、工房の空気からでもなにかを感じ取ってもらえていたらうれしいですね。わずか2週間ですけど、この先の人生で記憶の隅に残ることがあったらうれしい。

米原—— 実習が始まった1980年代の資料をみると、当時の本学ではわりと柔軟に「伝統産業」という分野を捉えていたことが

わかります。染織や陶芸といった京都の代表的な伝統産業の工房の名前が並ぶなか、手仕事に原点をもつ先端産業も実習先になっています。テレビ局や映画会社の制作部・時代劇の大道具さんの部署での実習もありますね。業種は違えど、言語化されていない動作や工夫に学ぶことを実習の大きな目的にしていたからでしょうか。実習先が約60ヵ所、毎年140名ほどの学生が実習に参加しています。いまよりもずっと大学の規模が小さい頃ですから、学生の参加率も高いですね。



千田—— 実習がきっかけで職人になる方もいますよね。もう40年以上前に唐長に実習に来た方は、現在、美濃手すき和紙の職人さんとして一線で活躍されています。今ではお仕事でお付き合いする仲間です。

米原—— この授業は伝統産業の後継者養成を目的としたものではありませんが、それでも学生にとって2週間の実習で経験したことが、その後の歩みを考えるきっかけになることもあります。職人の道に進む、ということだけではなく、働くということや、生活することについて立ち止まって考える機会になっていたらうれしいですね。

矢鋪—— 私も実習をきっかけに手仕事の背景や過程をもっと知りたいと思うようになり、卒業後の将来についてよく考えるようになりました。もともと工芸には関心があったのですが、具体的な職業として考え始めて。来春から、日本各地の伝統工芸品の商品企画や販売をおこなう企業で働くことになっています。千田さん、山田さん、あらためてよろしく願いします。

千田—— いつかお仕事で会うことを楽しみにしていますね。

山田—— その時はよろしくおねがいしますね。

登壇者プロフィール

千田優希 せんだ・ゆき [唐長十二代目]

約400年続く唐紙の老舗唐長として文化財や伝統建築など修復・復元も多く手掛ける。唐紙とは、日本建築に欠かせない襖や壁紙として、又、茶室など流派による好みを彩り、空間にさり気なく光の変化をもたらすもの。寛永年間創業の「唐長」は初代・千田長右衛門に始まり、先代・堅吉氏で十一代目。先代までは唐紙製作のみ行う工房だったが、十二代目は唐紙を襖や空間に施工すること、必要であれば空間そのものから提案制作。また使う側の美意識を積極的に研究し多様な視点から唐紙の効果を最大限に活かすことを目的とし、「美」への追求は惜しみない。建築や空間などにとどまらず女性ならではの美の表現も体现する。近年は京都二条城本丸御殿、桂離宮月波楼の唐紙復元がある。

山田悦子 やまだえつこ [山田織維／むす美]

ふろしきが伝える「包む・結ぶ文化」を糸口に日本文化の魅力を再発見する活動を展開。1944年創業の山田織維はふろしきの企画製造・卸売を行い国内外に販路を持つ。現代のライフスタイルに合うふろしきを追求し、さまざまな素材や染織加工技術などを駆使した商品展開は約500種。「minä perhonen」や「katakata」、「鈴木マサル」、「COCHAE」などとのコラボレーションにも精力的に取り組む。また、商品開発と共にふろしきの活用法の提案や普及活動にも独自のスタイルで取り組み「ワークショップ」は直営店や、学校、行政など年間約200回実施している。先人の知恵や日本人の美意識に加え、エコライフから防災まで現代に活かす文化であることを伝えている。



研究会

伏見人形研究会

案内人—— 山名伸生 [国際文化学部 教授]

- 研究会 伏見人形研究会
- 1 伏見人形の概要——日本の土人形の源流——2023年5月20日(月)——京都精華大学本館1階 伝統産業イノベーションセンター

2 饅頭食い人形——2023年6月10日(月)——京都精華大学本館1階 伝統産業イノベーションセンター

3 ちよろけん人形、お福人形、福助人形——2023年7月8日(月)——京都精華大学対峰館 T-112

4 犬、猫、すもう——2024年10月21日(月)——京都精華大学本館1階 伝統産業イノベーションセンター

5 動物、笑い物——2024年11月18日(月)——京都精華大学対峰館 T-112

6 歌舞伎物、童子物——2024年12月9日(月)——京都精華大学対峰館 T-112

7 干支、縁起物——2025年1月27日(月)——京都精華大学対峰館 T-112

8 赤もの——2025年2月25日(火)——京都精華大学対峰館 T-112



山名伸生さん(国際文化学部教授)を案内人に迎え、「伏見人形研究会」を開催。日本最古の土人形である伏見人形は、伏見稲荷大社の門前でつくられてきた郷土玩具。良質の土に恵まれ古くから窯業が盛んだった伏見で、陶器や瓦づくりと共に発展してきた手仕事です。題材は稲荷信仰や故事、習俗など多様で、近世の京都の庶民の暮らしぶりを知る手掛かりとしても興味深い意匠が多く残っています。江戸時代には「京名物」として国内各地に運ばれた伏見人形を参考に、それぞれの地域の特色を映した土人形が生まれたことから「日本の土人形の源流」ともいわれます。研究会では、山名さんの蒐集資料をもとに「題材」「技法」「意匠」「地域性」「習俗」「近世の物流」など多岐にわたる事柄について考えています。また、研究会で参考資料として使用した江戸後期～昭和中期の伏見人形については採寸等の記録整理も進めています。伏見人形研究会の内容は、八瀬陶窯を起点とした地域文化研究プロジェクトとの連携にも発展しました。

2024年度 実施日程

第1回 | 5月20日[月] | 京都精華大学 本館1階 伝統産業イノベーションセンター
伏見人形の概要——日本の土人形の源流

伏見人形はその製法や意匠が国内各地に伝播して広く影響を与えたことから「日本の土人形の源流」といわれます。初回は伏見人形の発祥から現代までの歴史を中心に、土人形がもつ地域性について語り合いました。



第2回 | 6月10日[月] | 京都精華大学 本館1階 伝統産業イノベーションセンター
饅頭食い人形

両親のどちらが大事かと聞かれた子供が、手に持っていた饅頭をふたつに割り、「どちらが美味しいか」と問い返したという説話から。子供が利口に育つようにとの願いを込めて子供部屋に飾られたり、安産祈願や出産祝いへの贈り物として愛されています。



第3回 | 7月8日[月] | 京都精華大学 対峰館 T-112
ちよろけん人形、お福人形、福助人形

ちよろけん人形は江戸末期から明治中期にかけ、京都でお正月に家々を回った門付芸人の姿を模したものです。頭に大きな張り子製の猿・福祿寿・福助などの帽子をかぶり、ささらや三味線、太鼓をたたいて祝言を述べ、面白おかしく踊り歩いて正月の雰囲気を盛り上げました。お福ちよろ・徳助ちよろ・猿(去る)ちよろ・馬ちよろなどがあります。



第4回 | 10月21日[月] | 京都精華大学 本館1階 伝統産業イノベーションセンター
犬、猫、すもう

伏見人形に登場する犬と言えば狎(ちん)。狎は江戸時代から明治時代にかけて人々に愛された小型犬です。伏見人形では、その特徴である黒い耳と巻いた尻尾の狎が様々なポーズをとっているものが作られています。



2024年度 実施日程

第5回 | 11月18日[月] | 京都精華大学 対峰館 T-112

動物、笑い物

表情豊かな動物たちに込められた意味を紐解きながら、伝統的な日本文化にみる動物観を考えました。また、子孫繁栄や豊穡への祈りをさまざまな意匠で表現した「笑い物」は郷土玩具の大きな魅力です。



第6回 | 12月9日[月] | 京都精華大学 対峰館 T-112

歌舞伎物、童子物

歌舞伎役者や演目に題材をとった歌舞伎物は、伏見人形が各時代の世相や流行をうつしてきたことがうかがえます。演目を象徴する場面をたくみに盛り込んだ意匠性の高さが見どころです。



第7回 | 1月27日[月] | 京都精華大学 対峰館 T-112

干支、縁起物

伏見稲荷大社の門前で発展した伏見人形で人気を集めた干支人形と縁起物。吉祥を願う人形の色彩にも注目です。



第8回 | 2月25日[火] | 京都精華大学 対峰館 T-112

赤もの

「赤もの」は別名「一文人形」とも呼ばれ、主に子供のおもちゃとして作られていました。子供の疱瘡除けの願いを込めて赤く着色されています。その素朴な色彩と意匠から、庶民に愛されてきた伏見人形の歴史がうかがえます。



西行
〔制作年不詳〕



三くど
〔昭和50年代頃〕



一つくど
〔昭和40年代頃〕



幸右衛門型布袋
〔制作年不詳〕



饅頭喰い
〔昭和50年代頃〕 菱屋（上田昌子作）



饅頭喰い
〔昭和初期頃〕 綿治（中村治平衛作）



饅頭喰い
〔昭和40年代頃〕 菱屋（上田平次郎作）



饅頭喰い
〔昭和初期〕 小幡土人形



饅頭喰い
〔幕末〜明治初期頃〕 古伏見



饅頭喰い
〔昭和50年代頃〕 丹嘉（大西重太郎製）



おぼこ
〔昭和初期〕 初瀬土人形（奈良）



徳吸ちよろ
〔昭和40年代〕 菱屋（上田平次郎作）



饅頭喰い
〔昭和初期〕 清水土人形



饅頭喰い
〔令和〕 浜松張子



饅頭喰い
〔令和〕 起土人形（愛知）



幸右衛門型狐
〔昭和初期〕



幸右衛門型狐「昭和初期」



寿老人「昭和前期」



ちよろけん(徳吸ちよろ)「昭和40年代期」



七福神(布袋さん)「明治」赤物



西行「昭和前期」



お福ちよろ「昭和前期」



宝船「昭和40年頃」



富士山と夫婦岩「昭和前期」



福助「大正頃」



子供祥福助「昭和40年頃」



幸右衛門型布袋「昭和50年頃」菱屋作



猿ちよろ「昭和50年頃」丹嘉作



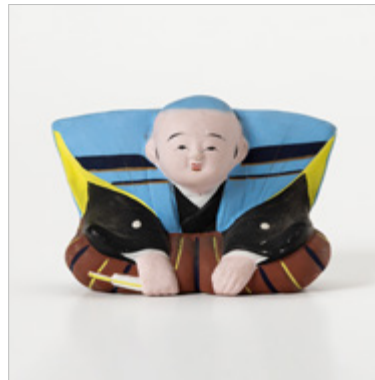
狐の賽銭勘定「明治初期」



千両箱乗り狐「明治初期」



子供祥福助「昭和50年頃」丹嘉作



うさぎの宝袋担ぎ「昭和初期」



俵福助〔明治初期〕



お福ちよろ〔昭和初期〕



ミツ蔵〔昭和初期〕



俵乗り福助三番叟〔明治初期〕



俵福助〔明治初期〕



蔵〔昭和前期〕



千両箱福助〔明治初期〕



お多福〔昭和40年代〕菱屋作



子持ち招き猫〔昭和50年代〕菱屋作



カ士ペーゴマ廻し〔昭和50年代〕丹嘉作



カ士〔明治初期〕



鯛啜え狎〔幕末〜明治初期〕



虎〔昭和50年代〕菱屋作



馬乗りカ士〔昭和50年代〕丹嘉作



カ士浴衣姿〔大正時代〕



御殿犬〔昭和前期〕



じゃれ犬〔昭和初期〕



犬抱き童子〔昭和50年代〕丹嘉作



唐辛子鼠〔昭和前期〕



二股大根と鼠〔昭和前期〕



寿老人〔昭和前期〕



一文犬〔昭和前期〕



大乗り童子〔明治前期〕



初辰さんの大猫〔昭和50年代〕



座り虎〔昭和前期〕



宝船〔明治時代〕



子持ち招き猫〔昭和50年代〕丹嘉作



座り猫〔明治初期〕



真向犬〔昭和前期〕綿治作



子持ち招き猫〔昭和50年代〕菱屋作



虎乗り豊干〔明治時代〕



力士〔昭和50年代〕菱屋作



鳩(二宅八幡) [昭和前期]



鳩(二宅八幡) [昭和前期]



福良雀 [昭和前期]



鼠 [昭和前期]



象と象使い [昭和50年代] 丹嘉作



狐(白蔵主) [昭和50年代] 丹嘉作



重なり猿 [昭和40年代]



米俵牛車 [昭和40年代] 丹嘉作



うさぎ [昭和40年代] 丹嘉作



瓢箪から駒 [明治初期]



馬乗り武者 [明治初期]



鯉持ち童子 [明治初期]



太鼓乗り童子 [明治初期]



猿回し童子 [幕末、明治初期]



娘道成寺 [昭和50年代] 丹嘉作



成田屋人形(暫) [昭和40年代] 菱屋作 ※二つ組のつ



おこぼ
〔昭和初期〕



成田屋人形 矢の根
〔昭和40年代〕 菱屋作 ※三つ組の一つ



亀抱き童子
〔幕末〜明治初期〕



頭巾かぶり童子
〔幕末〜明治初期〕



獅子舞童子
〔幕末〜明治初期〕



船乗り子供
〔大正〕



成田屋人形 助六
〔昭和40年代〕 菱屋作 ※三つ組の一つ



俵持ち鼠
〔昭和50年代〕 菱屋作



遊び子供
〔幕末〜明治初期〕



刀鍛冶と狐（三糸小鍛冶）
〔明治時代〕



御高祖頭巾
〔昭和50年代〕 丹嘉作



猿の三番叟
〔昭和30年代〕 菱屋作



定九郎
〔昭和50年代〕 丹嘉作



俵担ぎ童子
〔昭和初期〕



宝袋
〔昭和30年代〕



御幣持ち猿
〔昭和前期〕



複々製の素朴美のルーツ ——伏見人形が郷土玩具のお手本と言われるワケ

軸原ヨウスケ [デザイナー]

郷土玩具の頂点に君臨しながら、実際には高価で巨大、どちらかというと豪華な印象が多いが故に、郷土玩具好きの中でも最も敬遠される存在…それこそが伏見人形だ。私自身、郷土玩具の近くで20年近く過ごしてきたが、山名先生を除いて「伏見人形を集めている」という人に会ったことは一度もない。金銭的なハードルに加え、収納スペースのハードルも高く、蒐集がいかに困難かを山名コレクションが教えてくれる。美しい見た目だけでなく、ボリュームとその重さにも魅力の要因があるのだ。

ところで、なぜ伏見人形が郷土玩具の頂点と言われるに至ったのか、ここでは振り返ってみたい。伏見人形は全ての郷土玩具のお手本とも言われ、土人形(郷土玩具)のルーツは伏見人形、という話を聞いたことがある人もいるかと思う。しかし、その理由をよく知っている人は果たしてどのくらいいるだろうか。

江戸時代後期、伏見稲荷大社の参拝者は増加を続け、その街道のおみやげとして伏見人形は隆盛を極めていた。御所人形や伊豆蔵人形に比べると、伏見人形は庶民的な存在で比較的安価に買うことができたのだ。当時(江戸時代後期)、伏見人形の窯元はなんと60軒近くもあったそうだ(現在は一軒のみ)。

京都でおみやげとして買われた伏見人形は全国各地に持ち帰られるが、そこからの一部の民衆の知恵が働く…伏見人形を勝手に型取りして、似た人形を作り始めたら、自分たちの地域でも売れるに違いない、と。

複製の工程も、そこまで大変ではなかった。持ち帰った伏見人形を粘土で型取りする、それでできた型を多数複製し焼き固める。これで型が完成する。その型の中に土を詰め、つなぎ合わせ、窯で焼く(乾燥だけさせて焼かないものもある)。これで人形が完成。最後に胡粉を塗り、伏見人形をお手本に絵を描く。こうした人形を農閑期などに作り、売り始めたのだ。もちろん誰の許可もなく。それこそが今も日本中に残る郷土玩具(土人形)の始まりとされている。

江戸末期に出版された『広益国産考』(大蔵永常著、1859年に

全8巻発行)という農書では行政が農業の副業として、伏見人形の勝手の複製を推奨していて、詳細な手順が書いてあり、非常に面白い[図版1・図版2参照]。『広益国産考』の出版当時、既にこういった伏見人形を勝手に型取り、人形作りを副業とする動きは全国に見られたと考えられている。

また、複製されてできた人形を、また別の地域で型取りし複製、その人形をまた別の地域で型取り…を繰り返し、さながら伝言ゲームのような玩具の複々製活動がアメーバのように全国に広がっていった。なので、京都から離れるほど花などの柄はぼやけて抽象的になり、型も鋭利な輪郭線を失っていく、という非常に面白い現象が起きていた。

そう思うと、複製につぐ複製、素人の真似こそが「素朴美」を生み出していた要因としか言えないのではないか。それら玩具が民衆たちの手仕事の素朴さを奇跡的に密封したともいえるのだから、不思議なものだ。

この売り物としての郷土玩具の恣意的な広がりこそ、郷土玩具が民俗学的な評価もできず、学術的な扱いを困難にしている要素ともいえるだろう。しかし、今こそ、こういった一見ネガティブに見えるような前提を今一度受け止め、見直すことで、郷土玩具の扱いを再考する時期に入っているように思う。世に多数ある「伝統」と冠された何かだって、このような恣意的な広がりを見せた後、残ってきた側面が多くあるはずなのだから。

そんなことを考えていたタイミングで、伏見人形研究会に参加させてもらい、今までほとんど注目することのなかった伏見人形をじっくりと見つめている。今こそ郷土玩具の分母としての伏見人形に再注目すべし、である。



【図版1】『広益国産考』大蔵永常／1859



【図版2】『広益国産考』大蔵永常／1859

軸原ヨウスケ じくはらようすけ

1978年生まれ。岡山在住。「遊び」をテーマにしたデザインユニット「COCHAE」(2003年～)のメンバー。グラフィック折り紙や紙のプロダクト、「岡山名物きびだんご」(山方永寿堂)などのパッケージデザイン、出版企画や商品開発など幅広く活動している。2015年、新型こけし、創生玩具等のデザインプロダクトブランド「ドンタク玩具社」、玩具と工芸の間を模索する「玩具工芸社」でも活動。著書に『kokeshi book—伝統こけしのデザイナー—』(青幻舎、2010年)、『武井武雄のこけし』(PIE International、2012年)、『日本のおもちゃ絵—絵師・川崎巨泉の玩具帖—』(青幻舎、2014年)、『アウト・オブ・民藝』(共著、誠光社、2019年)、『アウト・オブ・民藝 | ロマンチックなまなざし』(共著、誠光社、2022年)など。

伏見人形の流れを汲んで始まった 岡山の久米土人形

長友真昭 [グラフィックデザイナー／なとも工作舎]

私は2023年の年末、インスタで丹嘉の伏見人形を買ったことがある。私が久米土人形の復元を始めてから半年ほど経った頃に、復元に際して胡粉と膠の割合や、肌の質感で悩んでいた。そのため少し高価だが土人形の始まりである、あの「伏見人形」を買ってみようと、ちょっとした勉強のつもりだった。インスタから問い合わせをして、到着して開けてみると想像以上に魅力的な人形で感動した。子供が将棋の龍玉に乗って、軍配団扇を持った童子物で高さが21センチと結構大きい。童子の後ろには良い感じに間抜けな顔の鶴が2羽いて、彫りが細かく、周りには荒く切られた金箔が多く貼り付けられている。高級感とゆるい絵付けが共存した不思議な人形だった。

山名先生の伏見人形研究会で、同じようなタイプの戦前のものを見ることができた。購入したものに比べると色数が少なく、顔の絵付けは筆先が長く伸びた三角目でスピード感のある描彩だった。伏見人形にはまず立体としての魅力があって、そこに筆がサツと描かれて、少し絵付けがずれてしまっても許せてしまうのは、古玩の良さと改めて感じた。菱屋の人形達や耳たぶが肩と繋がっているような幸右衛門型の布袋さんも、もちろん衝撃を受けた。それらは筆が上手と

いうのとはちょっと違って、今見ても衝撃的な絵付けで面白い。久米土人形と似た魅力を持っていて、今後何度も見直したい。

私が復元製作を行っている久米土人形は、江戸末期ごろに伏見人形の流れを汲んで始まったとされている。岡山県津山市の郷土玩具で、戦前までは9軒ほどの作り手がいたが、戦時中に廃絶。作り手は戦後に復元された岸川家の1軒となり、6代目岸川留代を最後の作り手として25年ほど前に途絶えてしまった。私は型が残っているということを聞いて、2年ほど前から岸川家を訪ね、現在ご遺族の方の力を借りて復元をしている。

久米土人形の型の中には伏見人形の影響を確実に受けたと思われる型が多くある。俵かつぎ、俵もち、四つ足立ち狎、福助、坐狎、恵比寿、大黒、猫などだ。座り狎や猫は、左右が反転しているだけで、ポーズや首飾りがそっくりである。当時の型屋がそのまま真似するのは避けて、反転だけさせて作ったのかもしれない。福助は伏見と形はそっくりだが、型の合わせ目がずれている。久米土人形にそういった型はいくつかあって、親族の方に話を聞くと、5代目岸川武士が子供達のために、どこかの郷土玩具や射的人形を瓦土で型取り



伏見人形 四つ足立ち狎



久米土人形 四つ足立ち狎



久米土人形 福助

して瓦屋に焼いてもらったりしていたとのことだった。福助は顔と背中 of 型の合わないで、型から外して土がまだ柔らかいうちに人形の形を変形させながら合わせなければならぬ。出来上がった福助はそれぞれちがうお辞儀の角度で、見える顔の角度も違ったりして、個性が出ていて面白くなる。

久米土人形と伏見人形の大きな違いは、写真で見ればすぐわかるほどの個性的な絵付けと焼成しない土人形という点だ。

絵付けについては、まずは写真を見てほしい。伏見人形とは全くの別物で個性的。昔の久米土人形は大胆な筆使いと、当時の作者の気持ちを知りたくなるような独特な表情で、愛好家には人気がある。『日本郷土玩具 西の部』(武井武雄著 地平社書房 昭和5)には「描彩は確然と個性があり、全部生地は白塗り、それに生々しい色を配してあるので、異様な冷め度さがあり、なんとなく逃げ出し度い様な気味悪さである。」と書かれている。久米土人形の個性的な絵付けと不思議な存在感を表す良い一説だと思う。少し厳しい言われ方をしているが、その後、久米土人形の製作者が高齢に

なっていくと筆使いも変化し、写真のような素朴でありつつも大胆な人形が作られるようになった。

また、陶土を焼成せずに、日陰で乾燥させてその上から絵付けをするので、重くてしかも破損しやすい。焼成しないのは、この地域の男児の雛祭りとして天神様を飾る風習があったからである。久米土人形といえば天神様というほど、当時はさまざまなサイズの天神様が作られていた。男の子の成長を願って天神様を飾るのだが、その後、古くなったり壊れたり、役目を終えた天神様は、川に流して元の土に還していたという。そういった名残もあって焼成しない、生土のままの製法が引き継がれてきた。

伏見人形の流れを汲んで始まった久米土人形は、型はそっくりでいるものの、信仰や製作者の独特な絵付けによってアレンジされて、郷土玩具として愛されていた。伏見人形は久米土人形以外にもっとたくさんの土人形に影響を与えていて、影響を受けた土人形のそれぞれが変化している。今回山名先生のコレクションを、久米土人形と見比べて、その面白さに改めて気づくことができた。とても楽しかった！

長友真昭 ながともまさあき

1998年生まれ。岡山在住。グラフィックデザイナー。玩具作家。久米土人形の復元活動中。2023年3月より岡山県津山市の郷土玩具「久米土人形」の復元活動を始める。2025年4月よりデザインユニット「COCHAE」に加入。なとも工作舎として新しい玩具も製作。



特集

八瀬陶窯からみる世界



2017年から継続して実施してきた「八瀬陶窯調査研究プロジェクト」では、「陶片群」「生活空間・工房」「人物像」の3分野から陶芸家：石黒宗麿についての調査・研究を行ってきました。

2024年度からは、八瀬陶窯だけでなく、研究フィールドをさらに地域にまで広げ、八瀬という地域が石黒宗麿の作陶や生活にどのような影響を与えたのかという観点から、人間国宝としての石黒宗麿としてだけでなく、「八瀬地域に住む一生活者：石黒宗麿」に迫ることで、さらにその多様な作品群や人間像を紐解いていくことを目指し、調査を行っています。「陶磁」「建築」「環境」「玩具」「民俗」という分野から、八瀬および周辺地域を学外の研究者やアーティストなどと共に巡りながら地域の景観や風習、歴史などについての調査を進めています。2025年度には、「八瀬の石黒さん家から見た世界」をテーマに、これまでの調査研究で得た知見やアイデアから掘り起こした事物を横断的に体感できるような展覧会を行う予定です。

この特集では、各分野の調査研究の概要と今後についてを報告します。

石黒宗麿と八瀬陶窯

石黒宗麿(1893-1968)は、1936年に京都市左京区八瀬に築窯し、晩年までこの地を拠点に陶器を作り続けた。1955年に鉄釉陶器の技法による重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定されるなど、中国や朝鮮の古陶磁に肉迫しつつも、独自のエスプリを持った個人作家として知られている。1956年には自身の工房が後進の陶芸家の研究の場となるべく「財団法人 八瀬陶窯」を設立。石黒の没後、八瀬陶窯は関係者の管理を経て、2003年からは京都精華大学が施設管理を行なっている。2023年には、工房のある母屋を修繕し、実地的に石黒の陶器作りの調査を行なっていく研究拠点として運用している。



4月7日[日] | 八瀬陶窯にて、近隣の皆さんや石黒宗麿の関係者の皆さんをお招きし、大学教職員・学生と共にお花見会を催しました。当日は40名ほどの方にお集まりいただき、桜の下で石黒夫妻の思い出や八瀬地域の移り変わりについて語りました。なかでも、石黒関係者の方に写真アルバムをお持ちいただき、在りし日の石黒夫妻の八瀬での暮らしぶりの聞き取り調査を行うことができました。

陶芸 チーム

中村裕太 [美術家、伝統産業イノベーションセンター] /

木村隆 [釉薬研究] / 田中大輝 [陶芸家]

石黒宗磨のスケッチブックに記されていた石黒の調合表を元に釉薬の解析を行い、現代でも手に入る材料を用いてテストピースを制作しました。また、合わせて八瀬陶窯、あるいは周辺地域の植物を用いた灰釉の実験も行いました。展覧会では石黒宗磨のスケッチ帳から起こした図案を写したタイルを使った作品を発表予定です。



八瀬陶窯にて陶片の釉薬を調査



テストピース作り



型紙を用いて石黒のスケッチを切り出し



テストピース焼き上がり



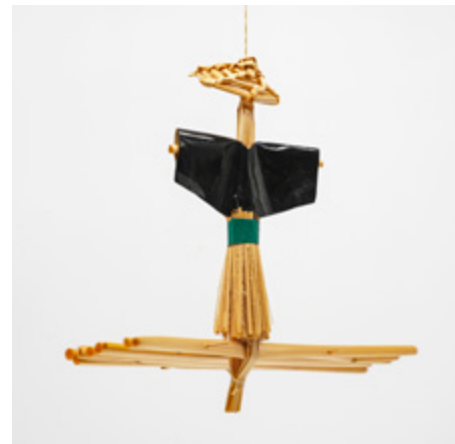
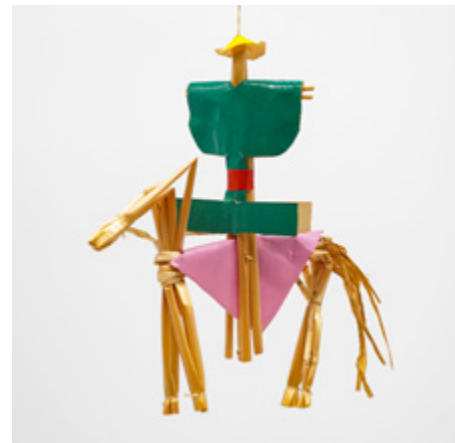
型紙を用いて石黒のスケッチをタイルに転写

玩具 チーム

軸原ヨウスケ [デザイナー] / 長友真昭 [デザイナー] / 山名伸生 [京都精華大学国際文化学部] /

尾崎織女 [日本玩具博物館] / 米原有二 [工芸研究、伝統産業イノベーションセンター]

かつて八瀬地域でも作られていた麦わら細工人形についての文献調査を行い、人形制作の再現も行いました。同時に月に一度「伏見人形研究会」を開催し、土人形の源流である伏見人形から得た知見やアイデアを元に伏見人形を転用した八瀬陶窯人形の創生を進めています。



八瀬および周辺地域で販売されていた麦わら人形(山名伸生コレクション)



日本玩具博物館の尾崎さんの指導の元、麦わら細工人形を制作



民俗 チーム

松元悠 [リトグラフ作家] / 麥生田兵吾 [写真家] / 菊地暁 [民俗学者] /
フォック・チン [京都精華大学芸術研究科]

八瀬の地域文化に詳しい専門家と調査を進めています。八瀬(西坂本)、比叡山、坂本(滋賀)をフィールドとし、それぞれの土地における陶器や陶片(松元)と、石仏(麥生田・菊地)の調査を行っています。こうした調査をもとに比叡山を介した二つの土地のつながりを明らかにしていきます。展覧会では、版画と写真作品を発表予定です。



八瀬陶窯周辺を散策

環境 チーム

山本麻紀子 [アーティスト] / 石川知海 [造園業] / 石川麻衣子 [森のどろんこ園運営] /
小出麻代 [伝統産業イノベーションセンター コーディネーター]

「藁細工」を糸口に、藁を用いた神事の調査(伊勢市大王町のわらじ祭など)や、地域に長年住んでおられる方への聞き取りや地元の造園家との現地フィールドワークを重ねてきました。また、石黒宗麿の暮らしと共に変化してきたであろう八瀬陶窯の庭に着目し、その植生や配置の観察、石黒夫妻が使用していたと考えられる庭に眠る生活道具を掘り起こす作業を通して、石黒が当時みていた庭や周辺の風景などを想像し、環境と石黒、環境と私たちとの在り方を探っています。



伊勢市大王町で毎年開催されている「わらじ祭」の調査



八瀬地域の方に注連縄作りを教わった

八瀬陶窯の庭の植生観察と剪定した枝をまとめていく作業を行った



石黒夫妻が使用していたと考えられる道具を庭から掘り出す作業を行った

建築
チーム

本橋仁〔建築史〕／諏佐遙也〔建築模型〕／
恵谷浩子〔奈良文化財研究所〕／齋藤雅宏〔ギャラリー Terra-S〕

八瀬陶窯の母屋の建築についての調査を行ってきました。展覧会に向けて、今後は石黒が描いた八瀬陶窯のスケッチをモチーフとし、板ダンボールを用いて原寸サイズの建築模型を制作します。また石黒の他に、八瀬をスケッチした今和次郎(瀬青会)、西山卯三、路上観察学会ら資料についての調査も同時に行っています。



八瀬陶窯の屋根や窓に使われている素材の観察

2024年度 八瀬陶窯調査研究プロジェクト 主な活動				[2025年3月16日現在]
01	4月7日	——	お花見会	八瀬陶窯
02	5月8日	陶磁チーム	釉薬の調査	京都精華大学
03	5月10日	環境チーム	地域調査	八瀬および周辺地域
04	5月15日	陶磁チーム	釉薬の調査	京都精華大学
05	5月20日	玩具チーム	第1回伏見人形研究会	京都精華大学
06	5月22日	陶磁チーム	釉薬の調査	八瀬陶窯
07	6月4日	環境チーム	地域調査	八瀬および周辺地域
08	6月7日	陶磁チーム	釉薬の調査	京都精華大学
09	6月10日	玩具チーム	第2回伏見人形研究会	京都精華大学
10	6月17日	陶磁チーム	テストピースの焼成	京都精華大学
11	7月8日	玩具チーム	第3回伏見人形研究会	京都精華大学
12	7月9日	玩具チーム	麦わら細工の調査	八瀬陶窯
13	7月11日	環境チーム	地域調査	八瀬および周辺地域
14	8月13日	玩具チーム	地域調査	八瀬および周辺地域
15	9月8日	環境チーム	地域調査	八瀬および周辺地域
16	9月10日	建築チーム	地域調査	八瀬および周辺地域
17	9月16日	民俗チーム	地域調査	八瀬および周辺地域
18	9月21日	環境チーム	わらし祭の調査	伊勢市大王町
19	9月22日	玩具チーム	麦わら人形の調査	日本玩具博物館
20	10月11日	環境チーム	地域住民からの糞細工の聞き取り調査	八瀬地域
21	10月13日	——	赦免地踊り調査	八瀬天満宮
22	10月21日	玩具チーム	第4回伏見人形研究会	京都精華大学
23	11月18日	玩具チーム	第5回伏見人形研究会	京都精華大学
24	11月24日	環境チーム	八瀬天満宮の注連縄制作見学	八瀬地域
25	12月9日	玩具チーム	第6回伏見人形研究会	京都精華大学
26	12月16日	全体ミーティング	各チーム進捗報告	オンライン
27	12月21日	環境チーム	地域住民より注連縄制作を教わる	八瀬陶窯
2025年				
28	1月9日	環境チーム	制作プランについてのミーティング	京都駅
29	1月27日	玩具チーム	第7回伏見人形研究会	京都精華大学
30	1月28日	運営チーム	展覧会タイトル案についてミーティング	京都精華大学
31	1月30日	陶磁チーム	ギャラリー Terra-S 下見	京都精華大学
32	2月2日	環境チーム	庭散策	八瀬陶窯
33	2月4日	全体ミーティング	展覧会タイトル共有、各チーム進捗報告	オンライン
34	2月5日	民俗チーム	地域調査	八瀬および周辺地域
35	2月14日	民俗チーム	地域調査	八瀬および周辺地域
36	2月18日	環境チーム	庭散策	八瀬陶窯
37	2月25日	玩具チーム	麦わら人形制作、第8回伏見人形研究会	八瀬陶窯・京都精華大学
38	2月26日	玩具チーム	制作プランについてのミーティング	八瀬陶窯
39	2月27日	建築チーム	制作プランについてのミーティング	オンライン
40	3月2日	環境チーム	庭散策	八瀬陶窯
41	3月6日	運営チーム	インストールミーティング	京都精華大学
42	3月6日	建築チーム	制作プランについてのミーティング	オンライン
43	3月16日	環境チーム	庭散策	八瀬陶窯

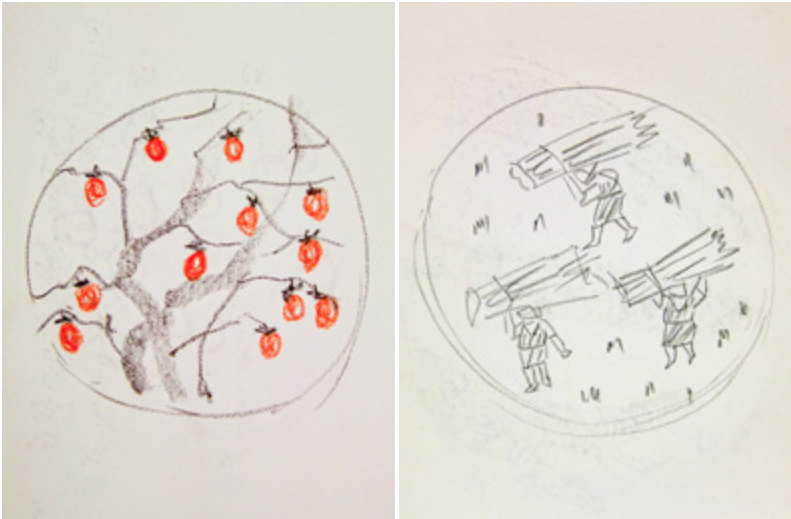
八瀬の石黒さん家から見た世界

中村裕太 [伝統産業イノベーションセンター]

陶芸家・石黒宗磨さんの家は、八瀬の端っこにある。石黒さんは、よく主屋の縁側に腰を下ろし、庭を見ながら思索に耽っていたという。どんな景色をここから見ていたのだろうか。正面には、比叡山の山並み、庭では、妻のとうさんが菜園をし、犬たちが駆け回っている。季節ごとに梅や桜、柿、紅葉、椿が色づき、鳥たちがさえずる。麓の街道に目を向けると、大八車を引く人々や薪を担いだ女性たちが行き交っている。

石黒さんのスケッチブックには、そんな八瀬の景色が何枚も描かれている。けれど、その膨大なスケッチを見ていくと、八瀬という土地の風土を描きながらも、ここではないどこかの景色を描いているように思えてくる。なぜなら、これらのスケッチの多くは、景色を写生したものではなく、皿や壺に合わせた図案に落とし込まれているからだ。石黒さんは、八瀬という土地に暮らし続けることで、そうしたどこにもない世界を描き出したのかもしれない。

とはいえ、結果として残されたスケッチを眺めているだけでは、石黒さんが見ていた景色を想像することは容易くない。ところが、主屋や庭を掃除したり、縁側に座って地元の方から八瀬の歴史を聞いていると、ふとそのスケッチが描かれた原因が見えてきたりする。展覧会では、八瀬の石黒さん家から広がる世界をいくつかのスケッチに描き留めていく。



石黒宗磨のスケッチブック(左:1965年頃か、右:1961-62年頃か) 提供:射水市新湊博物館

※ 2025年6月下旬よりギャラリー Terra-S にて開催される展覧会に向けて、石黒宗磨が作陶を行っていた八瀬陶窯を拠点に研究者や作家、地域の方たちと協働してプロジェクトを進めています。現在進行中のスケッチは、「石黒さんの八瀬スケッチのタイル絵」、「八瀬の麦藁人形の復興」、「伏見人形を転用した八瀬陶窯人形の創生」、「石黒さんの建物スケッチの書割模型と、今和次郎、西山列三、路上観察学会らの資料アーカイブ」、「八瀬と坂本で使われてきた器の調査とその版画」「八瀬と比叡山の石仏の調査とその写真」「八瀬陶窯の庭で見つけた石黒さん家の落とし物」など。





An Annual Seminar on “Architectural Photography / 建築写真”, To Be Continued...

Cecile Laly セシル・ラリ [Researcher, Center for Innovation in Traditional Industries]



Fig.1: Nicéphore Niépce, *Point de vue du Gras* (View from the Window at Le Gras), 1827.
[https://en.wikipedia.org/wiki/View_from_the_Window_at_Le_Gras#/media/File:Untitled_\(point_de_vue\),_Ni%C3%A9pce_1827_%E2%80%94_HRC_2020_\(cropped\).jpg](https://en.wikipedia.org/wiki/View_from_the_Window_at_Le_Gras#/media/File:Untitled_(point_de_vue),_Ni%C3%A9pce_1827_%E2%80%94_HRC_2020_(cropped).jpg)

Photography and architecture have been intrinsically linked since the invention of photography. The inherent immobility of buildings made them a perfect match for the long time of exposure required in the early days of photographic technology. For example, *Point de vue du Gras* (View from the Window at Le Gras), 1827, one of the first permanent photographs, taken in France by Nicéphore Niépce, features the roof of his house as seen from his window. It is believed that this now-iconic image may have required several days of exposure to fix onto the pewter plate (Fig. 1); such technical constraints undoubtedly contributed to the close connection between photography and architecture.

About two decades after the creation of *Point de vue du Gras*, Japan ended its isolation policy and reconnected to the world. At that time, photographic techniques and Western-style architecture were introduced to Japan, and soon, both traditional and modern buildings across the country became the subject of photographs. Before long, Architectural Photography emerged as an important genre, and during the following two centuries, Architectural Photography served to document and promote masterpieces of Japanese architecture, Japanese photography, and, more broadly, Japanese culture, both on a national and an international scale.

Despite its significance and widespread use, Architectural Photography in Japan has rarely been analyzed in depth. In light of this, we launched a Call for Papers in 2022, in collaboration with the French Thematic Research Network “Japarchi,” inviting scholars to explore the Japanese concept of “Architectural Photography / 建築写真” from a variety of perspectives, including historical, heritage-related, artistic, economic, sociological, and more.

This Research Seminar is open, multilingual, and interdisciplinary. Over the past two academic years (2023-24 and 2024-25), we hosted 12 speakers offering diverse approaches. Some were specialists in architectural history, others in the history of photography, while some came from fields like literature, anthropology, architecture, and archaeology. Presentations focused on the works of specific photographers, such as Wakaji Matsumoto (1889-1965), Ryūji Miyamoto (b. 1947), Hiroshi Sugimoto (b. 1948), and Toyota Horiguchi (b. 1955). Other sessions explored specific photography types, such as castle photographs in the 19th century or the photographs used in archaeological research.

Throughout the conferences over these two years, Architectural Photography consistently seemed to oscillate between beauty and functionality, the end and the means, as well as the direct representation of a built structure versus its metaphorical representation of life. But while important points have been raised, it feels as though we have only begun to scratch the surface of the Japanese understanding and practice of Architectural Photography, therefore, we intend to continue and expand this Research Seminar next year.

Program of the previous years (2023-24)

- ▶ Jean-Sébastien CLUZEL (Sorbonne université), *Survival Boogie Woogie. Néo-japonisme et photographie d'architecture*
- ▶ Véronique BRINDEAU (INALCO), *La photographie d'architecture selon Sugimoto Hiroshi*
- ▶ Jérémie SOUTEYRAT (photographe), *La place de la photographie documentaire en architecture (tokyo no ie et autres projets)*
- ▶ Gilles MASTALSKI (CRAO), *La redécouverte du fonds photographique de Wakaji Matsumoto (1889-1965). Un nouveau regard sur Hiroshima et le Genbaku dōmu avant le bombardement atomique*
- ▶ Chihoko ANDO (Kyoto Institute of Technology), *Old Japanese Castles and Photographs: An Examination of the Meanings of the Genre of “Castle Photograph” in the Dawn of Japanese Photography*
- ▶ Hiromi MATSUGI (Nichibunken), *État des lieux de la recherche sur la photographie d'architecture*

Program of the previous years (2024-25)

- ▶ Pauline Beichen YANG (University of Tokyo), *Reconstructing the Ruin: Photography, Novel, and Japanese Modernity in A True Novel (Honkaku Shōsetsu) by Mizumura Minae*
- ▶ Erez GOLANI SOLOMON (Bezalel Academy of Arts and Design Jerusalem, School of Architecture), *Photographing Post Growth — The Japanese Empty House*
- ▶ Atsuko SAKAKI (University of Toronto), *Trajectories of the Gaze and Body within Architecture and without — Takashi Homma's “Kanazawa 21-seiki bijutsukan” and Risaku Suzuki's “Aomori Museum of Art”*
- ▶ Romina BARTOCCI (INALCO), *La photographie dans la documentation archéologique de grands tumulus funéraires du IIIe au VIIe siècle au Japon*
- ▶ Oliver SALEEBY (université de Strasbourg, école d'art MJM), *Le passage du temps dans la photographie d'architecture de Ryūji Miyamoto*
- ▶ Philippe BONNIN (CNRS), *Dans les pas du photographe. Retrouver l'espace, retrouver la logique*

センターの活動



『月刊 なごみ』 2025年1月号／淡交社

記事「人間国宝・石黒宗麿、八瀬陶窯の現在 八瀬に住んでた石黒さん」において、センターで取り組む八瀬陶窯関連プロジェクトが紹介されました。



『京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター かわら版』

隔月発行のかわら版でセンターの諸活動を紹介しています。





淡田 明美 Akemi Awada

京都精華大学美術学部 デザイン学科 ビジュアル・コミュニケーションデザイン専門分野卒業。自動車会社にて「CUBE」「MARCH」「TIIDA」などの内装カラー&マテリアルデザイン開発に携わる。退職後、フリーランスとして携帯電話や住宅の塗料開発に従事しながら、ルリュール（製本工芸）を学ぶ。現在、針畑生活資料研究会にてデザインの観点から、生活道具・食について調査・記録している。



セシル・ラリ Cecile Laly

フランス生まれ。パリ・ソルボンヌ大学美術史学院博士課程修了。2014年、ケブランリ博物館の特別研究員として和風コレクションについて調査し、和風の研究を始める。その後、同テーマについて複数論文を発表。主な論文・書籍に「王子稲荷神社と装束稲荷神社の風市と火伏風 ―日本の風文化を支えるイベント―」（2018年）、「Appropriation de l'espace terrien et aérien par les cerfs-volants」（2020年）、「Cerfs-volants du Japon」などがある。



谷本 尚子 Naoko Tanimoto

1962年生まれ。室町の呉服問屋で幼少期を過ごす。ウィーンの工芸デザイン、ロシアの近代デザインを研究テーマとした後、近年、京都の家具の歴史と現場の調査を行なっている。2021年から京都精華大学に所属し、伝統産業イノベーションセンターの活動に参加する。



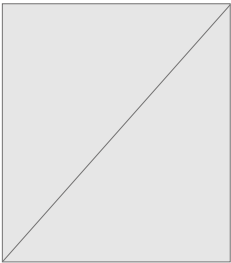
中村 裕太 Yuta Nakamura

1983年東京生まれ、京都在住。2011年京都精華大学博士後期課程修了。博士（芸術）。京都精華大学芸術学部准教授。〈民俗と建築にまつわる工芸〉という視点から陶磁器、タイルなどの学術研究と作品制作を行なう。近年の展示に「第17回イスタンブール・ビエンナーレ」（パリン・ハン、2022年）、「眼で聴き、耳で視る | 中村裕太が手さぐる河井寛次郎」（京都国立近代美術館、2022年）など。著書に『アウト・オブ・民藝 | ロマンチックなまなざし』（共著、誠光社、2022年）、『アウト・オブ・民藝』（共著、誠光社、2019年）。



米原 有二 Yuji Yonehara

1977年京都府生まれ。京都を拠点に工芸を対象とした取材・執筆活動をおこなう。2018年に京都精華大学伝統産業イノベーションセンター長に就任。工芸を起点とした社会研究・教育に取り組む。おもな著書に『京都職人 一匠のてのひらー』（『京都老舗 一暖簾のこころー』（ともに共著・水曜社）、『京職人ブルース』（京阪神エルマガジン社）、『近世の即位礼-東山天皇即位式模型でみる京職人の技術』（共著・青幻舎）など。



福岡 正藏 Shozo Fukuoka

〔事務局〕



小出 麻代 Mayo Koide

〔研究コーディネーター〕

美術家。2009年京都精華大学大学院芸術研究科博士前期課程芸術専攻版画領域修了。作品制作を通して、大きな声で語られてきた「歴史」の中に埋もれる、個別具体的な要素の重なりを、特に人と場所との結びつきの観点から解きほぐすことに関心を持つ。主な展覧会に、個展「尼崎市文化未来奨励賞受賞記念展『声声が灯して The polyphony of our narratives』」（尼崎市総合文化センター旧結婚式場／兵庫／2023）。「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2015 枯木又プロジェクト」（旧中条小学校枯木又分校／新潟）など。2024年度より、伝統産業イノベーションセンター・研究コーディネーターをつとめる。



Kyoto Seika University International Partner Universities and Institutions

京都精華大学 協定校／機関

USA

- University of Michigan School of Art and Design
- Bard College
- Southern California Institute of Architecture (SCI-Arc)
- Cornell College
- Rhode Island School of Design (RISD)
- California College of the Arts
- The Cooper Union School of Art
- ArtCenter College of Design
- International English Language Institute Hunter College, City University of New York

Canada

- English Language Institute, University of British Columbia

Brazil

- Escola da Cidade Sao Paulo

UK

- University of the Arts London / Chelsea College of Arts
- University of the Arts London / Camberwell College of Arts
- The University of Edinburgh / Edinburgh College of Art
- The Glasgow School of Art

Italy

- Romualdo Del Bianco

the Netherlands

- HKU University of the Arts Utrecht
- Gerrit Rietveld Academie

Germany

- Braunschweig University of Art
- Kunsthochschule Kassel

Finland

- Aalto University (School of Arts & Design & Architecture)
- The Arts Academy at Turku University of Applied Sciences

France

- L'Ecole Nationale Supérieure d'Architecture Paris-Malaquais
- L'Ecole de Design Nantes Atlantique
- Paris College of Art
- Ecole Spéciale d'Architecture
- L'Ecole Nationale Supérieure d'Art de Limoges
- Centre international d'études françaises (CIDEF)
- Université catholique de l'Ouest

Belgium

- Wallonie-Bruxelles International
- École Nationale Supérieure des Arts Visuels de La Cambre

Turkey

- Ibn Haldun University

India

- Indian Institute of Technology Bombay

Indonesia

- Maranatha Christian University

Korea

- Daegu University
- Hongik University

Thailand

- Chiang Mai University

Taiwan

- Providence University
- Taipei National University of the Arts
- National Museum of Taiwan History
- Soochow University

Hong Kong

- Chu Hai College of Higher Education

Vietnam

- Vietnam National University Hochiminh City / University of Social Sciences and Humanities
- Hue University of Sciences

Senegal

- Université Cheikh Anta Diop de Dakar (UCAD)
- Université Gaston Berger

Nigeria

- Kwara State University

Cameroon

- Université de Maroua

Republic of Mali

- Institut des Sciences Humanités
- Conservatoire Des Arts Et Métiers Multimédia Balla Fasseké Kouyaté (CAMM-BFK)

Burkina Faso

- Université Joseph Ki-Zerbo

Australia

- The Australian National University School of Art & Design

New Zealand

- AUT International House, Auckland University of Technology

Japan

- International Research Center for Japanese Studies
- Research Institute of Humanities and Nature
- Okinawa University
- Sapporo University
- The Faculty of Law and Economics, Okinawa University
- The Faculty of Foreign Languages, Sapporo University
- Kyoto University
- Kyoto city Zoo
- Kyoto Prefecture
- Nagahama city
- Tadotsu town
- Seika town
- Sakyo ward, Kyoto city
- Eizan Electric Railway Co.,Ltd.
- KYOTOGRAPHIE
- The Embassy Of The Republic Of Benin

Email dento2@kyoto-seika.ac.jp
Website <https://dento.kyoto-seika.ac.jp/>
Instagram/Twitter [@seika_craft](#)

Center for Innovation in Traditional Industries Partner Insitutions



國立臺北藝術大學
Taipei National University of the Arts

京都精華大学
伝統産業イノベーションセンター
イヤーブック2024
Center for Innovation in Traditional Industries
Yearbook 2024
Kyoto Seika University

発行日 | 2025年3月31日

監修 | 米原有二
編集 | 小出麻代
写真撮影 | 麥生田兵吾 (表紙、p.22-33、p.40-41、p.50-51、裏表紙)
デザイン | 川越健太

発行 | 京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター
〒606-8588 京都市左京区岩倉木野町137

